

26:31 そのとき、イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたはみな、今夜、わたしのゆえにつまずきます。『わたしが羊飼いを打つ。すると、羊の群れは散り散りになる』と書いてあるからです。 26:32 しかしわたしは、よみがえってから、あなたがたより先に、ガリラヤへ行きます。」 26:33 すると、ペテロがイエスに答えて言った。「たとい全部の者があなたのゆえにつまずいても、私は決してつまずきません。」 26:34 イエスは彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。今夜、鶏が鳴く前に、あなたは三度、わたしを知らないと言います。」 26:35 ペテロは言った。「たとい、ごいっしょに死ななければならないとしても、私は、あなたを知らないなどとは決して申しません。」 弟子たちはみなそう言った。 26:36 それからイエスは弟子たちといっしょにゲツセマネという所に来て、彼らに言われた。「わたしがあそこに行って祈っている間、ここにすわっていないさい。」 26:37 それから、ペテロとゼベダイの子ふたりとをいっしょに連れて行かれたが、イエスは悲しみもだえ始められた。 26:38 そのとき、イエスは彼らに言われた。「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここを離れないで、わたしといっしょに目をさまさないさい。」 26:39 それから、イエスは少し進んで行って、ひれ伏して祈って言われた。「わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようにではなく、あなたのみこころのように、なさってください。」 26:40 それから、イエスは弟子たちのところに戻って来て、彼らの眠っているのを見つけ、ペテロに言われた。「あなたがたは、そんなに、一時間でも、わたしといっしょに目をさましていることができなかつたのか。 26:41 誘惑に陥らないように、目をさまして、祈っていないさい。心は燃えていても、肉体は弱いのです。」 26:42 イエスは二度目に離れて行き、祈って言われた。「わが父よ。どうしても飲まずには済まされぬ杯でしたら、どうぞみこころのとおりをなさってください。」 26:43 イエスが戻って来て、ご覧になると、彼らはまたも眠っていた。目をあけていることができなかつたのである。 26:44 イエスは、またも彼らを置いて行かれ、もう一度同じことをくり返して三度目の祈りをされた。 26:45 それから、イエスは弟子たちのところに来て言われた。「まだ眠って休んでいるのですか。見なさい。時が来ました。人の子は罪人たちの手に渡されるのです。 26:46 立ちなさい。さあ、行くのです。見なさい。わたしを裏切る者が近づきました。」 26:47 イエスがまだ話しておられるうちに、見よ、十二弟子のひとりであるユダがやって来た。剣や棒を手にした大ぜいの群衆もいっしょであった。群衆はみな、祭司長、民の長老たちから差し向けられたものであった。 26:48 イエスを裏切る者は、彼らと合図を決めて、「私が口づけをするのが、その人だ。その人をつかまえるのだ」と言っておいた。 26:49 それで、彼はすぐにイエスに近づき、「先生。お元気で」と言って、口づけした。 26:50 イエスは彼に、「友よ。何のために来たのですか」と言われた。そのとき、群衆が来て、イエスに手をかけて捕らえた。 26:51 すると、イエスといっしょにいた者のひとりが、手を伸ばして剣を抜き、大祭司のしもべに撃ってかかり、その耳を切り落とした。 26:52 そのとき、イエスは彼に言われた。「剣をもとに納めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます。 26:53 それとも、わたしが父にお願いして、十二軍団よりも多くの御使いを、今わたしの配下に置いていただくことができないとも思うのですか。 26:54 だが、そのようなことをすれば、こうならなければならないと書いてある聖書が、どうして実現されましょう。」 26:55 そのとき、イエスは群衆に言われた。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持ってわたしをつかまえに来たのですか。わたしは毎日、宮ですわって教えていたのに、あなたがたは、わたしを捕らえなかつたのです。 26:56 しかし、すべてこうなったのは、預言者たちの書が実現するためです。」 そのとき、弟子たちはみな、イエスを見捨てて、逃げてしまった。

## 導入

イースターシリーズ説教の第二回です。

先週は、イエスの死に対する備えについて学びました。

高価な香油がイエスに注がれたこと、イスカリオテのユダによる裏切り、そして、イエスと弟子たちがともに過ごした最後の過越しについて話しました。

この過越しの食事のときに、イエスのご自身を過越しの羊だとおっしゃいました。

また、パンとぶどう酒をご自身のからだに血に関連付けられました。  
ヨハネ 1 : 29 でヨハネが語った「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」ということばとイエスが結びついたわけです。  
イエスは、ヨハネが語ったことばを成就しようとしておられました。  
では、今日は次の個所に読み進めていきます。  
今日の個所には、3 つのできごとが記されています。

1. ペテロがイエスを知らないと言うことを、イエスが予言なさる。(31-35 節)
2. ゲツセマネの園でのイエス。(36-45 節)
3. イエスがイスカリオテのユダに裏切られ、捕えられる。(47-56 節)

#### 1. ペテロがイエスを知らないと言うことを、イエスが予言なさる。(31-35 節)

もしここで私が皆さんにとっても難しい質問をしたら、皆さんは何と答えるでしょう。その質問とは、これです。あなたはイエス・キリストなど知らないと言うことがあるでしょうか。

きっと全員、そんなことは言わないと答えるでしょう。

では次に、もう少し具体的な話をしましょう。

想像してください。皆さんは今、北朝鮮にいます。そして、宣教師だったので逮捕されました。与えられた選択肢はふたつです。クリスチャンであることを否定すれば釈放されます。しかし、クリスチャンだと白状すれば死刑です。

ここで少し考えてみましょう。そのような状況に置かれたら、どうするでしょうか。

多くのクリスチャンは、実際に困難に直面するまでは、どんなことがあっても自分はイエスに従えると思っています。

先ほど話したような選択肢を突き付けられて、イエスに従うのは非常にむずかしいことです。先週、種を蒔く人のたとえから、多くのクリスチャンが試練に遭うと信仰を失ってしまうことを学びました。

試練に遭って信仰を失ってしまうおもな理由は、ペテロがつらい状況でイエスを知らないと言ってしまったのと同じ理由です。

ペテロはイエスを知らないと言いました。それは、聖霊に満たされていなかったからです。神の聖霊の力が彼のうちに働いていなかったのです。当時のペテロは、自分自身の力に頼っていました。

神の聖霊の力がない状態では、クリスチャン生活やイエスのための働きが困難になると、くじけてしまいます。

ここでふたつ、さらに詳しく読み解くべき事柄があります。

##### a) イエスは全知である。(31-32 節)

(イエスにはすべてを知る能力がある。)

イエスは 31 節で、その夜のうちに弟子たちが全員つまずくとおっしゃいました。ペテロだけでなく、弟子たち全員がイエスを離れていくのです。

「つまずく」と訳されたギリシャ語の単語は、わなをしかけるとか、つまずくような物を置くという意味です。

イエスは、その夜まもなく弟子たちがつまずかされて、イエスに対する忠誠心を失うと予言なさいました。

弟子たちがまもなくつまずくという予言の裏付けとして、イエスはゼカリヤ 13 : 7 を引用なさいました。

ゼカリヤ 13:7 剣よ。目をさましてわたしの牧者を攻め、わたしの仲間の者を攻めよ。——万軍の【主】の御告げ——牧者を打ち殺せ。そうすれば、羊は散って行き、わたしは、この手を子どもたちに向ける。

7節全体は引用なさいませんでした。この部分を引用なさることで、それが永遠に定められた神のご計画のうちであることを弟子たちに知らせておられたのです。神はそうなることをご存じでした。神にとってもイエスにとっても、予想外のことはありません。

イエスによる説明がなければ、弟子たちはゼカリヤの預言を理解できなかったでしょう。ゼカリヤ書 13 章を読むと、そこには偶像礼拝をする偽預言者について記されています。そして、主がご自身の民の間から偽預言者たちを取り除かれるのです。

しかし、7節で突如、「わたしの牧者」と神が呼ばれる人物にスポットが当てられます。ヘブル語が実際に意味するところは、「わたしと同等の全能なる者」です。

これは明らかにイエスのことです。そして、この「神なる牧者」を打ち殺すように神が命じられたのです。

これは、イエスの十字架の出来事よりも約 450 年前の預言です。

神は、旧約聖書の大預言書と小預言書の随所に、イエス・キリストの生と死と復活を指し示す内容を挿入しておられます。

このことから、聖書全体のテーマがイエスとその贖いの御業についてであることがわかります。

イエスはつらい内容を語られた後、弟子たちを励まそうと次のように語られました。

「しかしわたしは、よみがえってから、あなたがたより先に、ガリラヤへ行きます。」  
イエスのご自身の死に勇敢に臨まれました。それは、死に打ち勝つ力を持っていることをご存じだったからです。

私たち信徒も、死と真正面から向き合うことができます。イエスがすでに死を経験してくださり、死からよみがえってくださったからです。

弟子たちはまだ死を恐れていました。イエスがもうすぐ死なれるという現実を受け入れることができませんでした。

イエスは、死を恐れてはいけないと弟子たちに幾度となく伝えてこられました。

#### ヨハネ 11 : 25-26

11:25 イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。 11:26 また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬることがありません。このことを信じますか。」

32 節で、イエスのご自身の復活を前もって予言なさいました。それは、弟子たちを元気づけるためでした。

#### b) 弟子たちは、肉を頼みにしていた。(33-35 節)

ペテロは明らかに、イエスの話をしっかり聞いていませんでした。ペテロは、イエスへの忠誠心を一生懸命主張しました。イエスを決して見捨てないと真剣に思っていたが、イエスが捕えられたショックを乗り越えられる力には肉にはないことをわかっていませんでした。

33 節でペテロは他の弟子よりも自分は上だと考えます。

他の弟子たちがイエスを離れても、自分は決して離れたりしないと仰いました。

そこでイエスははっきりとおっしゃいました。

ペテロがどのような状況でイエスを否定するか、あらかじめお伝えになったのです。

「今夜、鶏が鳴く前に、あなたは三度、わたしを知らないと言います。」とおっしゃいました。

私たちの肉のうちに良いものは一切宿らないことを、ペテロは身をもって経験しなければなりません。

ローマ 7:17 ですから、それを行っているのは、もはや私ではなく、私のうちに住みついている罪なのです。

私たちには罪深い性質があり、肉という罪深い性質による行いで神を喜ばすことはできません。これは、なかなか学ぶのがむずかしい真理です。

イザヤ 64:6 私たちはみな、汚れた者のようになり、私たちの義はみな、不潔な着物のようです。私たちはみな、木の葉のように枯れ、私たちの咎は風のように私たちを吹き上げます。

イエスに対する忠誠心を告白できなかったのは、ペテロだけではありませんでした。いかなる状況にせよ、弟子たち全員がそうできなかったのです。

## 2. ゲツセマネの園のイエス。(36-45 節)

次は、なかなかむずかしい個所です。それまでにないほど助けを必要とされた瞬間に、イエスの人間性が垣間見えます。

イエスは完全に神であると同時に、完全に人でもありました。

罪は犯されませんでした。苦しみは私たちと同じように感じられました。

私たちと同じように感情を持っておられ、身体的にも感情的にも痛みを感じられました。

この個所で、ゲツセマネの園におけるイエスの経験について 3 つの事柄に注目します。

### a) 悲しみ (36-38 節)

ゲツセマネとは、オリーブの絞り機という意味です。イエスがよく弟子たちを連れて祈りに行かれたのはこの場所です。(ヨハネ 18:2)

この園は、おそらく信徒の所有地で、祈りや修養のための場所として使われていたでしょう。

園のまわりには柵があって、入口があったと思われます。

イエスは弟子たちに入口のところで待つように言いつけられました。

そのときイエスとともに入るのを許されたのは、ペテロとヤコブとヨハネだけです。

3 人だけを連れていったのは、困難な状況での苦悩についてさらに教えるためだったかもしれせん。

ペテロとヤコブとヨハネには、学ばなければならないことがありました。それは、謙虚で貧しい心の必要性です。神に用いられて役に立つためには、これが必要です。(マタイ 5:3)

また、神に完全に頼ることも 3 人に教えておられたのだと考えます。

私たちには、他のクリスチャンに支えてもらわなければならないときがあります。これはとても大切なことです。互いに支え合うよう努めなければなりません。

けれども、神だけが私たちを助けることができになるというときもあります。

そのようなとき、私たちのたましいは奥底からうめくのです。

あまりにも苦しみが大きくて、神の聖霊だけが私たちを助けることができる状態です。

皆さんはそのような目に遭ったことがあるでしょうか。私はあります。皆さんが、誰も助けられないときに神の聖霊が助けてくださったと言えることを望みます。

38 節で、イエスはご自身の心の内を 3 人の弟子に明かされます。

イエスは弟子たちに、悲しみのあまり死ぬほどだとおっしゃいました。

イエスの気持ちを表現するのに使われたギリシャ語の単語は、比喩ではなく本当に死んでしまう症状を意味する非常に強い表現です。

心の悲しみや傷が原因で死んでしまうということを目にすることがあります。実際に、あまりの悲しみによって死亡する症状があります。

ショックや悲しみが心臓に悪影響を与え、心不全を引き起こすのです。

イエスが置かれていた状況は、夫や妻、子ども、両親など、身近な家族を突然失った人が感じるショックや苦しみに似ていました。

おそらく、イエスにとってもっとも激しいサタンとの葛藤だったでしょう。

なぜイエスはここでこれほどまでに苦しまれたのでしょうか。

イエスが死ぬほど悲しんでおられたのは、ご自身が「罪」そのものになられるからです。

それは、耐えがたいことでした。100%聖なるご性質が、罪によって完全に撃退されてしまうのです。イエスは血の汗を流されました。  
神の目は悪を見ることができないと、預言者ハバククは語ります。(ハバクク 1:3)

b) 祈り (39-45 節)

イエスがゲツセマネの園で次に体験されたことは、神への必死の祈りです。  
イエスは、もし可能であればこの「杯」を取り去ってほしいと神に2度祈られました。  
つまり、イエスご自身が十字架上で「罪」となり、人類のために死ぬこと以外の方法で、人類に救いをもたらす方法はないのでしょうか、と神に尋ねられたのです。  
神のみこころを行うという務めから逃げようとしたものではありません。ただ、人類を救うのに他の方法はないのかと尋ねられただけです。  
この個所には、神がどのようにイエスにお答えになったかは記されていません。けれども、その後の出来事から、その答えを推測することができます。  
残念ながら人類を救うにはこの方法しかない、という答えです。  
この個所で、イエスは祈りについて非常に大切なことを教えておられます。  
私たちは常に御父のみこころに従って祈らなければならないということです。  
私たちが祈るとき、たいていの場合、神に何をしてほしいかをわかって祈ります。けれども、その祈りの内容に対する神のみこころが何であるかは知りません。  
自分にとって何がベストか自分でわかっているつもりでも、それが間違っていることはよくあります。  
神が知っておられる事柄を、私たちは知りません。もし知っていたなら、祈り方も内容もまったく変わるかもしれません。  
実りある祈りの習慣とは、神のみこころを見出し、それに従う意志を持つことです。  
私たちが知るべきことのほとんどは、すでに聖書に記されています。みことばを注意して読めば、多くの場合、私たちの日常の問題に対する神のみこころはそこに見出すことができます。

c) 神の力をいただく経験 (45-46 節)

祈った後、イエスは、神のみこころに従って進もうと立ち上がられました。  
イエスは、人類を罪の罰から救う道は他にないことを受け入れられました。そして、神のみこころを成し遂げるといふご自身の使命にまっすぐに突き進もうとされました。神は、与えられた使命を遂行できる力をイエスにお与えになりました。  
イエスはこのときのために弟子たちを3年間整え、備えてこられました。  
そして今、人類を罪から救い贖うという重要な務めに備えて、神がイエスを完全に整えられました。  
神がすべてを導いてくださるとき、不可能が可能になります。  
旧約聖書の列王記第二 6 章には、目に見えない神の軍勢が神のしもべエリシャを守った印象深い話があります。

列王記第二 6 : 8-17

6:8 アラムの王がイスラエルと戦っていたとき、王は家来たちと相談して言った。「これこれの所に陣を敷こう。」 6:9 そのとき、神の人はイスラエルの王のもとに人をやって言った。「あの場所を通らないように注意しなさい。あそこにはアラムが下って来ますから。」 6:10 イスラエルの王は神の人が告げたその場所に人をやった。神の人が警告すると、王はそこを警戒した。このようなことは一度や二度ではなかった。 6:11 このことで、アラムの王の心は怒りに燃え、家来たちを呼んで言った。「われわれのうち、だれが、イスラエルの王と通じているのか、あなたがたは私に告げないのか。」 6:12 すると家来のひとりが言った。「いいえ、王さま。イスラエルにいる預言者エリシャが、あなたが寝室の中で語られることばまでもイスラエルの王に告げているのです。」 6:13 王は言った。「行って、彼がどこにいるかを突き止めなさい。人をやって、彼をつかまえよう。」 そのうちに、「今、彼はドタンにいる」という知らせが王にもたらされた。 6:14

そこで王は馬と戦車と大軍とをそこに送った。彼らは夜のうちに来て、その町を包囲した。6:15 神の人の召使いが、朝早く起きて、外に出ると、なんと、馬と戦車の軍隊がその町を包囲していた。若い者がエリシャに、「ああ、ご主人さま。どうしたらよいのでしょうか」と言った。6:16 すると彼は、「恐れるな。私たちとともにいる者は、彼らとともにいる者よりも多いのだから」と言った。6:17 そして、エリシャは祈って【主】に願った。「どうぞ、彼の目を開いて、見えるようにしてください。」【主】がその若い者の目を開かれたので、彼が見ると、なんと、火の馬と戦車がエリシャを取り巻いて山に満ちていた。

自分の目標ではなく神のご計画のために神のみこころに従って進んでいるなら、目に見えない神の御力が私たちを守り、私たちの必要を備えてくださると確信できます。このことをいつも心に留めておいてください。  
イエスが神の助けを必要とされたのなら、私たちにはなおさら神の助けが必要です。

イザヤ 40 : 28-31

40:28 あなたは知らないのか。聞いていないのか。【主】は永遠の神、地の果てまで創造された方。疲れることなく、たゆむことなく、その英知は測り知れない。40:29 疲れた者には力を与え、精力のない者には活気をつける。40:30 若者も疲れ、たゆみ、若い男もつまずき倒れる。40:31 しかし、【主】を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかけて上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れない。

### 3. イエスが裏切り者の口づけによって捕えられる。(47-56 節)

マタイの福音書に記されているイエスが裏切られて捕えられる最終の場面です。この個所で、3つのことに注目しましょう。

#### (1) ペテロが神のみこころに抗おうとした。(50-53 節)

ここで、棒や剣を持った大勢の人々が、イエスを捕えようとやってきました。状況を必要以上に荒立てようとしたようです。

ユダがイエスに口づけをして裏切ると、イエスは捕えられました。

ペテロは、自分が持っていた剣をかざして、大祭司のしもべの耳を切り落としました。

ペテロは勝手な思い込みで状況を判断し行動しました。ペテロは実際には神のみこころに抗っていました。

イエスもペテロに、「わたしが父にお願いして、十二軍団よりも多くの御使いを、今わたしの配下に置いていただくことができないとも思うのですか。」とおっしゃいました。

ペテロにはとてもできないことをする能力を、イエスはお持ちでした。

どんな状況であっても、神のみこころに抗うのは、この個所のペテロのようなものです。ペテロは、武装した何百人もの人々に自力で立ち向かおうとしていたのです。まったく勝ち目はありません。

聖書のみことばは、神のみこころに対する抵抗は、無駄な抵抗だと語ります。

歴代誌第二 13:12 見よ。神は私たちとともにいて、かしらとなっておられる。また、神の祭司たちも私たちの側におり、合図のラッパを手にして、あなたがたに対し進撃の合図を吹き鳴らそうとしている。イスラエル人よ。あなたがたの父祖の神、【主】と戦ってはならない。とうてい勝ち目はないからである。」

私には、この聖書個所に関わる尊い証があります。皆さんの励ましになればと思い、今日、ここで話しさせていただきます。

今から 33 年前の 1984 年、私はスコットランドのエジンバラに行きました。それは、フェイス・ミッション・バイブルカレッジで 4 日間続く面接のためでした。当時、私は仕事も家も手放し、故郷を離れて神に仕えるよう召されていると感じていました。

私たち夫婦は、カレッジの客間に宿泊していました。

一日目の夜、熟睡して翌朝目が覚めると、私たちのベッド脇でひざまずいて祈っている若い女性がいました。

びっくりして、最初は言葉が出ませんでした。

しばらくして声をかけると、女性も私たち夫婦がベッドで寝ているのを見て驚いていました。客間に誰かが泊まっていると聞かされていなかったそうです。

この女性は、普段この客間で朝の祈りとデボーションの時間を持っていたとのことでした。

15分ほど経つと、ドアの下から手紙が差し込まれてきました。そこには、おふたりがいるとは知らずに部屋に入ってしまったすみません、とありました。

また、祈りのときに神が歴代誌第二 13 : 12 のみことばをはっきりと示された、と書かれていました。

私は聖書を開いてそのみことばを読みました。そして、神が私の心をご存じであることを確信しました。それだけでなく、この状況を用いて、神のみこころに抵抗してはいけないと神が明確に語ってくださったと確信しました。そのみこころとは、神が私たち夫婦のために用意してくださった働きに備えて訓練を受けるためにこのバイブルカレッジに来ることです。当時、私の職場は待遇が良く、車もあてがわれていました。また、持ち家もありました。そういったものに後ろ髪を引かれて、神のみこころに抗おうとしていたのです。

ですから、あのときあの若い女性が間違っただけで私たちの部屋に入ってきたことを今も感謝しています。

神のみことばは正しいですから、神のみこころに抵抗することは私にとっても私の将来にとってもよくありません。

もちろん、過去 33 年間で犠牲を払わなければならなかったこともあります。けれども私たち夫婦にとって、神のみこころに従ったのは自分の考えた道に進むよりもはるかに良い決断だったと心から言えます。

私たちの子どもたちにとっても良い決断でした。

今日のメッセージのポイントをひとつだけしか覚えていられないとしたら、どうかこのことを覚えておいてください。私たちの人生のために備えられた神のみこころは、私たちが自分自身で開くどんな道よりもすばらしいのです。

主なる神に抵抗しないでください。それは無駄な抵抗ですから。

## (2) この出来事は預言の成就であった。(54 節)

神は人類のための救いと贖いのご計画についてあらかじめ預言なさいました。

旧約聖書のみことばではっきりと預言が記されている個所では、常に神の名誉が試されています。

神が称えられるためには、神のことばが実現しなくてはなりません。

イエスは、ご自身が苦しんで死に、死からよみがえらなくてはならないと、少なくとも 3 度弟子たちにおっしゃいました。(マタイ 16 : 21、17 : 22-23、18-19)

旧約聖書の詩篇 41 篇と 55 篇では、親しい友が救い主を裏切るとダビデが語っています。

(詩篇 41 : 9、55 : 12-14)

またイザヤ書 53 章には、イエスの死について詳細な預言の数々が記されています。

イエスは、そこで起こっていることはすべて神の完全なご計画の一部であるとペテロに納得させなければなりません。

私たち自身や周囲の人々の人生に良くないことが起こった時、それも神のご計画に沿ったことだとは、なかなか納得できません。

けれども、そのようなときにこそ、私たちは神をいっそう信頼しなければならないのです。

## (3) 弟子たち全員がイエスを見捨てて逃げた。

弟子たちは、イエスがユダに裏切られて捕えられたことが神のご計画の一部だという事実を受け止めることができませんでした。

イエスはその夜、大牧者が捕えられて弟子たちは散り散りになると、31 節で前もって話しておられました。

そのイエスのおことばどおりになりました。イエスは、弟子たちの心も思いも弱さもすべてご存じでした。

弟子たちは、一時の感情に考えを左右されてしまい、状況を慎重に思索しませんでした。

それで、一番簡単な道、つまり逃げることを選んでしまいました。

今日読んだ箇所から、弟子たちはイエスの教えに集中しておらず、祈りの時間をなおざりにしていたことがわかります。

そのような態度が、弟子たちの困難に対する抵抗力を弱めてしまいました。

人生の大切な選択やイエスの働きについて決断を早まらないためには、常に神のみことばに満たされ、イエスと祈りで深く交わっていなければなりません。

そうすれば、神のみこころに抵抗したり、イエスについていくのを邪魔しようとする悪魔の策略に陥ってしまったりする可能性は少なくなります。

アーメン。